

【論文】

複数の助動詞を伴う倒置文の派生*

木村宣美

0. はじめに

Huddleston and Pullum (2002: 1107) で指摘されているように、比較節 (comparative clauses) の主語が文末に生じることがある。その際、倒置文の主語は、(1a) と (1b) からわかるように、複数の助動詞 (multiple auxiliaries) に後続しなければならない。

(1) a. It is no more expensive than would be the system you are proposing.

b. *It is no more expensive than would the system you are proposing be.

(Huddleston and Pullum 2002: 1107)

(2) It is no more expensive than the system you are proposing would be.

(3) a. He works harder than his father works.

b. *He works harder than works his father. (Huddleston and Pullum 2002: 1107)

(1) のように、主語 the system you are proposing が複数の助動詞 would be に後続する位置に生じるとは許されるが、主語と助動詞の倒置 (subject-auxiliary inversion: SAI) が適用されて、主語が would のみと倒置することは許されない。また、(3) からわかるように、主語が動詞と倒置することはない。

Brueing (2015) は、様々な倒置の現象を、SAI で統一的に扱うことは難しく、2 種類の異なるタイプの倒置 (SAI が関わる倒置と複数の助動詞が関わる倒置) を仮定する必要があると論じている。2 種類の異なるタイプの倒置のうち、SAI で扱うことのできない複数の助動詞と主語が倒置する現象に (4) がある。

(4) a. **Comparative Substitution**

More important has been the establishment of legal services. (Emonds 1976: 35)

* 本稿では、著者が独自に、図形を加えたり、ボールド体で表記した箇所がある。助動詞 (時に動詞) は斜字体で表記し、主語には下線を引き、前置された句あるいは主語に後続する句は太字体で表記する。本研究は、令和2年度 - 令和4年度日本学術振興会科学研究費助成事業 (学術研究助成基金助成金) ((基盤研究 (C) 研究課題『2種類の助動詞倒置文の基底構造と派生メカニズムの解明』(課題番号 20K00656)) に基づく研究成果の一部である。

b. Participle Preposing

Speaking at today's lunch *will be* our local congressman. (Emonds 1976: 36)

c. PP Substitution

Here *will be (will stand)* the memorial to the war dead. (Emonds 1976: 37)

d. So Inversion

The results of education are long term and far reaching and **so** *must be* our commitment.

(Toda 2007: 189; cf. Brueing 2015)

e. Nor Inversion

I haven't been surprised by the rally, **nor** *should have been* my readers.

(Park 2012: 326; cf. Brueing 2015)

Brueing (2015) では、SAIが適用される倒置とは異なり、構文 (4) の主語は TP の指定辞ではなく、Culicover and Winkler (2008) が提案しているように、低い位置 (a lower position for the subject) にあることを示す現象であるとの指摘がなされている。¹ 2種類の倒置文を仮定する Brueing (2015) の分析を支持し、木村 (2021b) は、Huddleston and Pullum (2002) の主語後置 (subject postposing) と SAI を混ぜ合わせた特徴を有する構文であるとする分析を批判的に検証し、2種類の異なる倒置文、すなわち、1) SAI が関わる倒置文と 2) SAI が関わない倒置文、すなわち、複数の助動詞に主語が後続する倒置文が存在することを明らかにした。

本稿の目的は、SAIが派生に関わらない倒置文、すなわち、複数の助動詞に主語が後続する倒置文の派生を詳細に検討することにある。第1節では、文体的倒置 (stylistic inversion) として分析される、所格倒置 (locative inversion)、分詞前置 (participle preposing)、as 倒置、so 倒置、比較節倒置 (comparative inversion) の派生に関する分析を概観する。第1.1節では、Chomsky (2013, 2015) が提案するラベリングアルゴリズム (Labeling Algorithm: LA) に基づく分析を提案する Maeda (2021) を、第1.2節では、be が主部と述部から成る小節、すなわち、PredP を選択するという仮定に基づく、分詞前置の派生に関する分析を提案する Samko (2014) を、第1.3節では、主語が複数の助動詞の後に生じることから、TP の指定辞ではなく、主語は焦点 (focus) が付与される TP の中間的な位置 (a middle field) に移動し、動詞句 (the verb phrase *v*P) が TP の指定辞から CP の指定辞へと移動し、比較節削除 (comparative deletion) が適用されて、述語を欠く述語 as 挿入節が導かれると提案する LaCara (2015) を、第1.4節では、英語の比較倒置に対する主辞駆動句構造文法 (Head-Driven Phrase Structure Grammar: HPSG) に基づく分析を提案する Park (2017) を概観する。第2節では、複数の助動詞を伴う

¹ 主語は動詞句内に留まり TP の指定部に移動することはないと分析する Culicover and Winkler (2008) とは異なり、Brueing (2015) は、主語位置を明示してはいない。なお、寄生的空所 (parasitic gaps) や多重 WH 疑問文 (multiple wh questions) や擬似空所化 (pseudogapping) に基づく、主語は動詞句内にあるとする議論は、Culicover and Winkler (2008: 631–635) を参照のこと。

倒置文，すなわち，主語が複数の助動詞に後続する後置文の派生に対する小節分析を提案する。第2.3.2節では，述語を欠く述語 as挿入節に対する，移動と削除に基づく分析を提案する LaCara (2015) の問題点，すなわち，動詞句内要素が主語に後続する位置に生じる現象に説明を与えることができないことを指摘し，LaCara (2015) の分析に修正を加え，複数の助動詞を伴う倒置文に対する移動と削除に基づく分析を提案する。本稿では，主語と主語に後続する動詞句内要素が多重に焦点化されることから，TP内に多重の焦点句 FocPがあると仮定する。上位の FocPの指定辞に小節内の主語が移動し，下位の FocPの指定辞に動詞句内要素が移動する。値を持たない素性 (unvalued feature) を持つ Foc主要部が Probeで，素性の値を持つ句が Goalとなる Probe-Goal関係に基づく一致のメカニズムに従い，多重の Focの指定部への移動を終えた後の段階で，VoivePが，TPの指定辞に，それから CPの指定辞に，連続循環的に移動し，比較節削除が適用されて，複数の助動詞に主語が後続する倒置文が導かれるという分析を提案する。

1. 文体的倒置と複数の助動詞

1.1. ラベリング (Labeling) に基づく倒置文の分析 : Maeda 2021

Maeda (2021) は，所格倒置，as倒置，so倒置，比較節倒置等の倒置文の派生について，Chomsky (2013, 2015) が提案するラベリング・アルゴリズム (LA) に基づく分析を提案している。² すなわち，主語が動詞句内 (*v*P-internal position) に留まる倒置焦点構文 (inverted focus constructions) において，主部と述部が {XP, YP} 構造となり，ラベルが決まらない可能性があり，この問題を回避するために，ラベリングに係る方略，すなわち，述部 (YP) が移動する，あるいは削除される方略に基づく分析が提案されている。すなわち，統語派生において，削除される統語要素は LA では見えない (invisible) と仮定し，as挿入節，so倒置，比較節倒置では，{XP, YP} 構造が生成され，ラベルが決まらない可能性があり，この問題を回避するために，動詞句削除が義務的である (obligatory VP-ellipsis) ことが求められるとの主張である。

主語が動詞句内に留まる時，動詞句 (*v*P) 内に {XP, YP} 構造が生じる。この {XP, YP} 構造を回避することができない時には，Chomsky (2013, 2015) に従えば，ラベルが決まらずに，文の派生が破綻することになる。これを回避し，ラベルを決定する方略が，XPあるいはYPが移動することである。結果として，{XP, YP} 構造が解消され，動詞句内に残留する句の主要部が句のラベルになる。Maeda (2021: 94) は，倒置文のラベルを決定するための方略として，(5) を提案する。

(5) In { α XP, YP}, the movement /ellipsis of YP results in α being labeled X.

² 統語要素 (syntactic object: SO) が {H, XP} 構造の時，LA により Hがラベルになる。{XP, YP} 構造において Xと Yが素性 F (ϕ -features, Q-features) を共有する時，素性 Fがラベルになる。あるいは，XPが移動する時，Yがラベルに，YPが移動する時，Xがラベルになる。

- a. $\{\alpha \text{ XP, YP}\} (\alpha = ?)$
- b. $\{\alpha \text{ XP, } \cancel{\text{YP}}\} (\alpha = X)$

(5b) は、YP が移動あるいは削除されることにより、 α のラベルが X になることを示している。

Maeda (2021: 99) は、1) 主語が複数の助動詞に後続する、2) 冗語 *there* が倒置文では認められないことに基づき、主語は通常の TP の指定部ではなく、動詞句内に留まると仮定している。(Culicover and Winkler 2008; cf. Samko 2014, LaCara 2015) 倒置文の派生に関する重要な特性として、Maeda (2021: 99-100) は、許容される倒置文において、動詞句削除が義務的でなければならないと主張する。この点を、(6) を例に取り、考えてみることにする。

- (6) a. *Abby knows more languages than her father knows/does her father (*know).* (Merchant 2003: 56)
- b. *Abby got the Nobel Prize, as did her father (*get the Nobel Prize).* (Merchant 2003: 63)

(6a) では *know* が、(6b) では *get the Nobel Prize* が削除されず、顕在化する時、文は非文法的となる。この義務的な動詞句削除の適用は、LA により動機づけが与えられると主張されている。Maeda (2021: 100) によれば、(6b) の派生は (7) である。

- (7) a. *Abby got the Nobel Prize, as did* [_{DP1} *her father*] (**get* [_{DP2} *the Nobel Prize*]).
- b. $\{\varepsilon <T, C> \{\delta \mp \{\gamma \text{ DP}_1 \{\beta <R, v> \{\alpha \text{ R, DP}_2\}\}\}\}\}$
 $\varepsilon = <T, C>, \delta = ?, \gamma = ?, \beta = <R, v>, \alpha = D_2$
- c. $\{\varepsilon <T_{[E]}, C> \{\delta \mp_{[E]} \{\gamma \text{ DP1} \{\beta <R, v> \{\alpha \text{ R, DP2}\}\}\}\}\}$
 $\varepsilon = <T_{[E]}, C>, \delta = D_1, \gamma = D_1, \beta, \alpha$

LA により、 α のラベルは、R が移動し、 v に併合されることから、D2 となる。 β は、 $<R, v>$ である。主語が動詞句内にあることから、 $\{\gamma \text{ DP}_1, \beta\}$ への最小探索 (minimal search: MS) は、 γ のラベルを決めることができず、この結果、 $\{\delta \mp, \gamma\}$ への MS も δ のラベルを決めることもできない。このように、動詞句が削除されない場合に、ラベルが決まらずに、文が非文法的になるとの主張がなされている。他方、 γ のラベルを決めるために、 β に動詞句削除を義務的に適用した派生が (7c) である。 β を削除することにより、 γ のラベルが D_1 となり、派生が収束するという分析である。すなわち、Maeda (2021) によれば、義務的な動詞句削除が適用されることにより、 $\{\text{XP, YP}\}$ 構造が回避され、ラベルが決まるという結果がもたらされる。すなわち、倒置文の派生過程において $\{\text{XP, YP}\}$ 構造が生じることからラベルが決まらないという問題を解消するのが、義務的な動詞句削除であるという分析である。

1.2. 分詞前置：Samko 2014

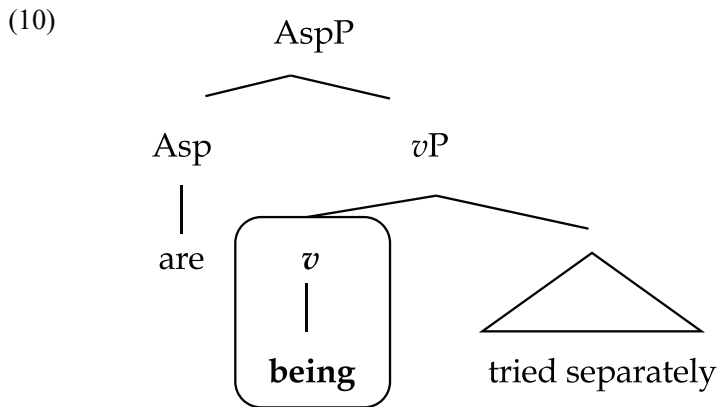
分詞前置では、進行あるいは受動の be の分詞補部が文頭に生じ、主語が文末に生じる。(Emonds 1976, Rochemont 1978, Rochemont and Culicover 1990)

- (8) **Jutting down from his long, graying locks** *were* his ever-present giant sideburns, each shaped like the state of Idaho. (Samko 2014: 371)

Samko (2014: 371-372) では、分詞前置は、一番高い動詞句 (the highest available *vP*) が TP の指定辞に A 移動 (A-movement) すると分析されている。³

- (9) a. **Being tried separately from Koike** *are* Nomura and three former executives.
 b. *Tried separately from Koike are being Nomura and three former executives.
 c. *Tried separately from Koike are Nomura and three former executives being.

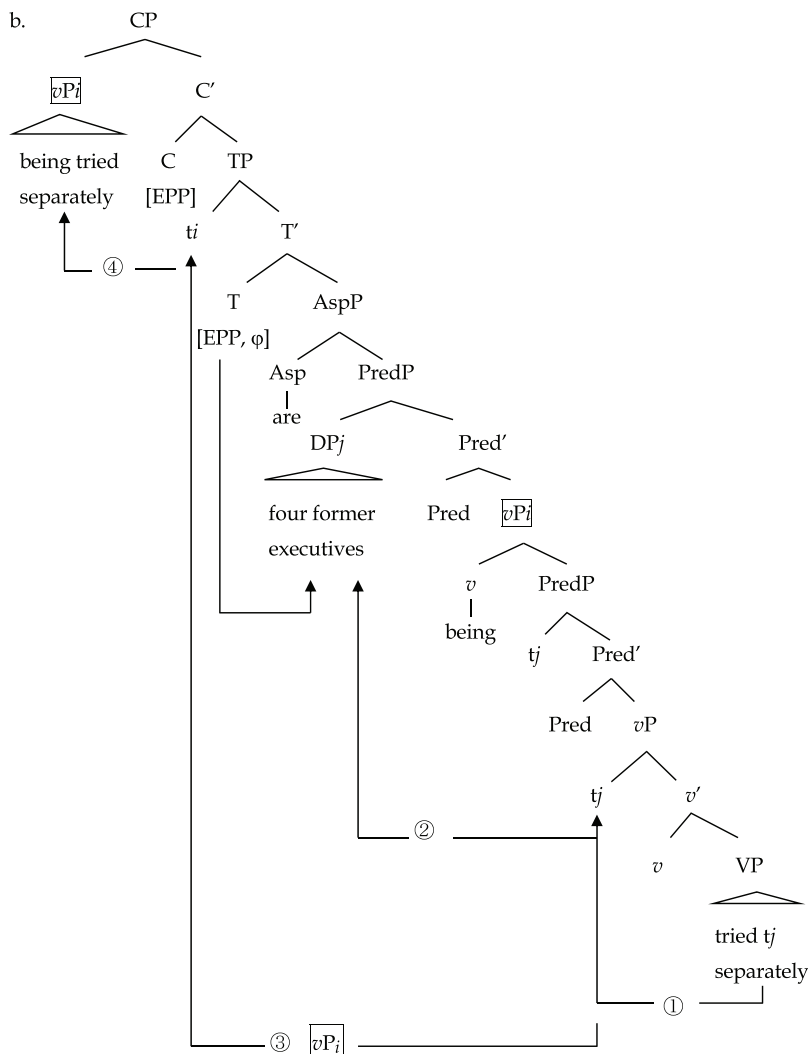
分詞前置では、より大きな進行の分詞 (progressive participle) のみの前置が許されることから、Samko (2014: 372) は、構造 (10) を提案している。



³ 前置される分詞が TP の指定辞に A 移動する証拠として、Samko (2014: 372) では、(1) 通常の主語と共起することができない (i) a. ***Undermining Abbey's confidence** the decline in value of Lloyds' shares *was*. b. *The decline in value of Lloyds' shares **undermining Abbey's confidence** *was*. (2) 上昇述語 (raising predicates) 構文に生じ、主節の主語位置にある (ii) **Undermining Abbey's confidence** *seemed to be* the decline in value of Lloyds' shares. (3) 付加疑問文 (tag questions) において、通常の主語ではなく、*there* となる (iii) a. ***Surrounding the stricken president** *are* power brokers, aren't they. b. %**Surrounding the stricken president** *are* some power brokers, aren't there. cf. (i) **Leaning against a lamppost** (there) *was* a lonely figure of a man. (Bolinger 1977: 95) ことが指摘されている。前置詞句を主語とする分析として、Bresnan (1977), Bresnan (1994), Ono, Kimura and Sano (1983), Culicover and Levine (2001) を参照のこと。

分詞前置構文が導かれる派生において、Samko (2014: 373) は、beが小節 (small clause) 補部、すなわち、PredPを取り、その主要部 Predには EPP特性 (EPP property) があると仮定する分析が提案されている。分詞が前置される文では、主語が動詞句内に留まると仮定する Maeda (2021) とは異なり、通常的主語が PredPの指定辞に移動する。次に、動詞句 (*v*P) が TPの指定辞に、その後、CPの指定辞に移動する。⁴ この提案に基づく派生は (11b) である。

(11) a. **Being tried separately** are four former executives. (Samko 2014: 375)



⁴ Samko (2014: 373) では、分詞は CPの指定辞に A' 移動 (A'-movement) すると分析されている。この移動を支持する証拠は、次の (i) の非文法性が示しているように、疑問文や話題化の A' 移動が許されないことにある。(i) a.*When_i were **leading the group down** Bombardier Inc. shares t_i? [constituent questions] b.*Jeff Maggert, leading the way is. [topicalization] c.*Was softening the blow the fact that Mirror Group's cable television account was one of the four pieces of business? [polar questions] 前置された分詞が CPの指定辞にあることで、移動が阻止され、(i) が非文法的であることに説明を与えることができると主張されている。

1.3. 倒置を伴う as 挿入節 (inverting *as*-parentheticals) : Potts 2002, LaCara 2015

LaCara (2015: 219) では、述語を欠く倒置を伴う述語 *as* 挿入節 (predicate *as*-parentheticals) の分析が提案されている。

- (12)a. Harvey will kiss a pig, as *will* Mary.
b. Harvey has bought a farm, as *has* Mary.

倒置を伴う述語 *as* 挿入節の特性をまとめると、次の (13) となる。

- (13) Properties of inverting *as*-parentheticals
- The subjects of inverting *as*-parentheticals appear after auxiliaries.
 - Multiple auxiliaries precede their logical subjects. Subjects are not in SpecTP in *as*-parentheticals.
 - Expletive subjects are completely banned from inverting *as*-parentheticals. Subjects are not in SpecTP.⁵
 - Subjects must leave Spec ν P and move out of VoiceP.

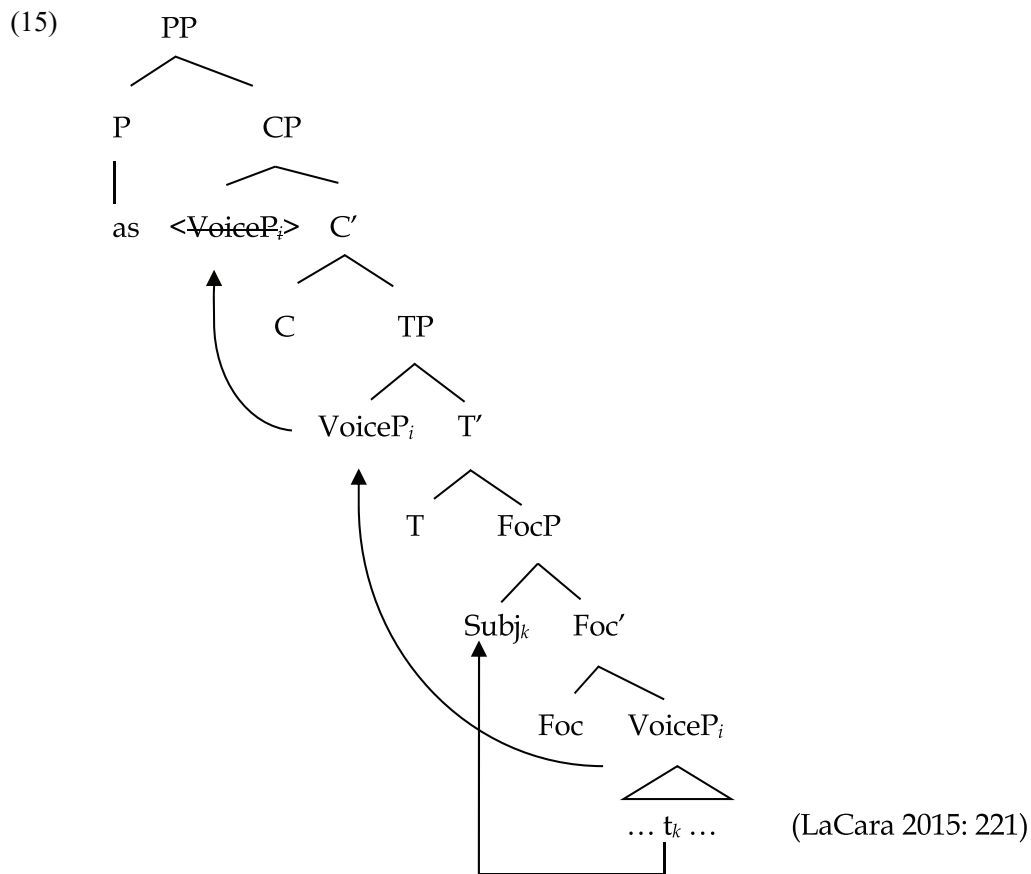
この述語 *as* 挿入節では、(14) で示されているように、複数の助動詞が主語に先行することが許され、SAIで導くことができない倒置文である。

- (14)a. The US trade deficit could be an issue, as *could be* the fact that much of China's economy is still fueled by exports. (LaCara 2015: 220)
b. By the end of the trip, Klaus will have seen many bats, as *will have* Eddie.⁶ (Potts 2002: 640)

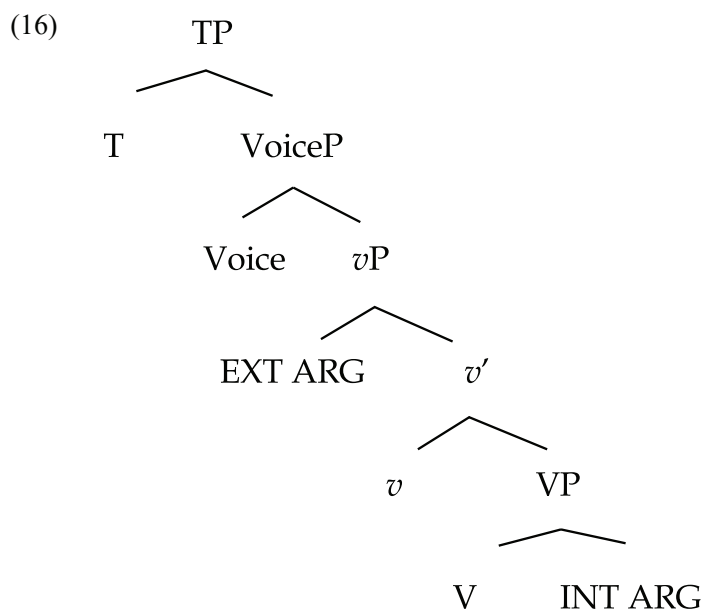
主語が複数の助動詞の後に生じるということは、TPの指定辞にはないことを示し、主語は焦点 (focus) が付与される TP の中間的な位置 (a middle field) にあり、動詞句 (the verb phrase ν P) が TP の指定辞から CP の指定辞へと移動し、比較節削除が適用されて導かれると LaCara (2015: 220) では提案されている。その構造が (15) である。

⁵ 冗語の *there* や *it* は述語 *as* 挿入節に生じることができない。(i) a. *There might be a show tomorrow, as *might (be) there* on Friday. b. *It will rain tonight, as *will it* tomorrow. (LaCara 2015: 231; cf. Maeda 2021)

⁶ この (14b) は、Potts が査読者との議論の過程で示された例文 (Potts 2002: 640, 注8) である。主語が重いことにより、重名詞句転移 (heavy NP shift: HNPS) が適用されているのではないかとの指摘に対して、査読者の指摘を支持する証拠であるとして、(14b) が示されている。



Merchant (2013) は、態 (voice) と項構造 (argument structure) における空所と先行詞のミスマッチに関わる事実を説明するために、分離動詞句 (a split vP)、すなわち、 v^0 の態及び項構造の特性を分離する構造を仮定し、 vP が VoiceP に支配され、節の態が決まると主張する。



LaCara (2015: 235-236) によれば、倒置を伴う述語 as 挿入節では、態のミスマッチ (voice mismatch) (17) 及び項構造のミスマッチ (argument structure mismatch) (18) は許されない。

- (17)a. *The janitor should remove those bins, as *should be* the others.
b. *I haven't implemented the system with a manager, as *will be* it.
c. *It should be noted, as *does* Dennett, that freshmen are often foolish.
d. *The system can be used by anybody, as *have* you. (LaCara 2014: 236)
- (18)a. *John closed the door, as did the window.
b. *The door closed, as did John. (LaCara 2014: 236)

この事実から、LaCara (2015: 236) は、倒置を伴う述語 as 挿入節では、*vP*ではなく、*VoiceP*がマッチしていなければならないことを指摘し、主語が動詞句内に留まると仮定する Maeda (2021) とは異なり、主語が *VoiceP* から焦点化される位置に移動するとの分析が提案されている。

Potts (2002) では、as 挿入節内の空所は統語的に空な動詞句の代用形 (a syntactically empty VP pro-form) の移動により派生されるもので、Maeda (2021) とは異なり、動詞句削除 (verb phrase ellipsis: VPE) によるものではないとし、移動に基づく分析が提案されている。

- (19)a. *Nina quickly bought two durians, exactly as we met a chef who did.
b. Nina quickly bought two durians, and we met a chef who also did.

(LaCara 2015: 223; cf. Chomsky 1977)

(19a) は as 挿入節で、(19b) は VPE である。波線が引かれている箇所は、複合名詞句 (complex noun phrase) を成し、移動の島 (islands) である。VPE が関わる (19b) が文法的で、as 挿入節が関わる (16a) が非文法的であることから、as 挿入節の派生には、削除ではなく、移動が関わっていると Potts (2002) は主張する。⁷

Potts (2002) の空演算子に基づく移動分析に対して、LaCara (2015) は、移動と削除に基づく分析を提案する。(20) で示されているように、イギリス英語やアイルランド英語では、動詞が残留する VPE が許されることがある。この現象を根拠に、空演算子ではなく、完全な動詞句から動詞が移動していることを示しているとの主張がなされている。

⁷ As 挿入節と VPE の違いとして、先行詞に課される局所性の違いが指摘されている。(i) The fact that Sue read the map carefully probably means that she stayed on the trails, as *did* Chuck. (a. stay on the trails b. *read the map carefully). (LaCara 2015: 224) VPE とは異なり、複合名詞句内の動詞句を as 挿入節では先行詞とすることはできない。

(20) The FAA has a similar duty in the USA, as *have equivalent organizations in almost every country throughout the world*. [British English] (BNC CN2 770) (LaCara 2015: 225)

倒置を伴う述語 *as* 挿入節の特性 (13) を共有する構文に談話倒置 (discourse inversion) があり、分詞前置が含まれる。LaCara (2015: 237) は、分詞前置や所格倒置と同様の派生過程を仮定することで、倒置を伴う述語 *as* 挿入節の特性に説明を与えることができると主張する。分詞前置と倒置を伴う *as* 挿入節の類似点の一つとして、LaCara (2015: 238) では、主語が複数の助動詞の後に生じるという特性が指摘されている。

(21)a. The mayor will be speaking tonight, as *will be the Chancellor*.

b. *The mayor will be speaking tonight, as *will the Chancellor be*.

(22)a. Speaking tonight *will be the Chancellor*.

b. *Speaking tonight *will the Chancellor be*.

類似点の二つ目として、LaCara (2015: 238) では、助動詞に後続する主語には、焦点強勢 (focal stress) が与えられなければならないことが指摘されている。^{8,9}

(23)a. Mary kissed a pig, as *will YOU*.

b. *Mary wants to kiss a pig, as *WILL she*.

⁸ Culicover and Winkler (2008) は、倒置文の機能は、主語を焦点化する (the function of focus-making the subject) ことにあると主張する。この機能を果たすことができない時、その文は非文となることが指摘されている。(i) a. *Anna_i ran much faster than SHOULD have she_i/SHE_j/someone. b. *Bill Clinton_i said more than COULD have the president_i. (Culicover and Winkler 2008: 644)

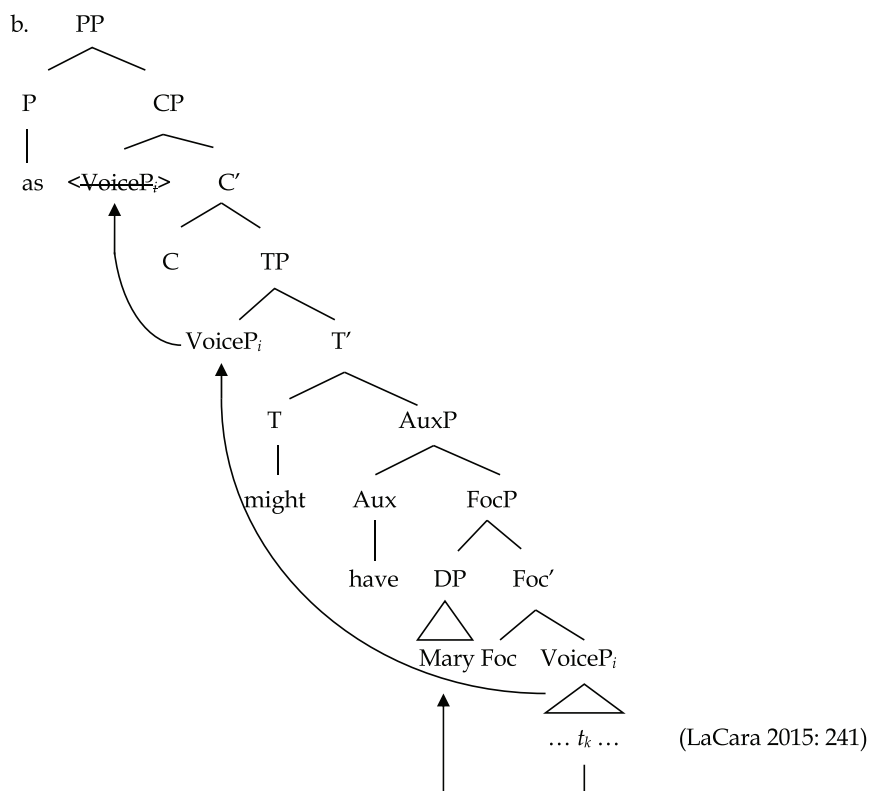
⁹ Culicover and Winkler (2008) は、倒置文 CIの主語は、TPの指定辞ではなく、動詞句内に留まると分析する。これは、通常の主語が Extended Projection Principle (EPP) の要請で、動詞句内から TPの指定辞に移動するという分析とは異なる分析である。Culicover and Winkler (2008) は、主語が動詞句内に留まることは、主語が対照的焦点 (contrastive focus) を担う要素であり、強勢が置かれる場合に限り認められる現象であり、EPPが適用されないのは、統語論と意味論・音韻論、あるいは統語論と談話・語用論における一般的な相互作用と結びついていると主張する。この分析を要約して、i) the subject must be interpreted as a contrastive focus, ii) the focused constituent must be prosodically highlighted and must occur at the right edge of the intonational phrase (ip), and iii) the highlighted effect on the focused subject is strengthened by ellipsis of the non-contrastive material. (Culicover and Winkler 2008: 637) と述べられている。最近の研究では、要素が焦点を担う場合には、機能範疇の指定辞にあると分析されるが、Culicover and Winkler (2008: 639-640) では、倒置文の主語は移動することなく動詞句内にあり、対照的な強勢が置かれる等の音韻上の特性は、インターフェイス条件により決定されると提案されている。すなわち、Align R (Comma, ip): Align the right edge of a constituent type Comma Phrase in syntactic representation with the right edge of an ip in phonological representation. や Right Edge Alignment of Focus (REAF): Each focused constituent is right-aligned in ip. 等が適用されて、音韻的特性が決まるとする分析が提案されている。

(24)a. Speaking tonight *is* THE CHANCELLOR.

b. ??Speaking tonight *IS* the chancellor.

これまでの議論をまとめると、倒置を伴う述語 as 挿入節の派生過程は、次の (25) となる。

(25) a. ... as *might have* Mary



1.4. 比較倒置 : Park 2017

Park (2017) では、英語の比較倒置 (comparative inversion: CI) に対して、HPSGに基づく分析が提案されている。Park (2017) は、Culicover and Winkler (2008) が指摘する CI では主語が複数の助動詞に後続することが許されるとする現象に着目し、通常の SAI で分析される倒置とは異なる現象であることを指摘している。

(26)a. Who was responsible for keeping the records would be a more reliable witness as to their accuracy as a whole than *would be* any of the original makers.

b. To her, thinking, as she ever was thinking, about Johnny Eames, Siph was much more agreeable than *might have been* a youngster man who would have endeavored to make her think about himself.

(Culicover and Winkler 2008: 630)

Park (2017: 205) は, (27) を例にとり, Potts (2002) とは異なり, CIは重名詞句転移 (HNPS) が適用されて導かれるわけではないことを指摘している。¹⁰

- (27)a. Ali would have driven a car to the park more eagerly than *would have* the students (in our class on environmental consciousness) **to the concert.** (Potts 2002)
- b. Jim would have translated the English much better than *would have* students in his class **read the Spanish.**
- c. John could have read French more fluently than *could have* Joe.

CIにHNPSが適用されているのではないということは, (27a) では前置詞句 *to the concert* が, (27b) では動詞句 *read the Spanish* が後続している, (27c) の主語は軽い1語の名詞であるということからわかる。

Park (2017: 211) では, SAIが適用されて倒置が生じる現象と異なり, CIでは主語が複数の助動詞に後続することが許され, 更に, (28b) に見られるように, 後続する主語には, 対照的で焦点を担う意味を有する句 (the phrase with contrastive focus meaning) *spoken English* が, その後に続くことが許されることが指摘されている。^{11, 12}

- (28)a. Megan can jump higher than *could have* Bill.
- b. John read French more fluently than *could have* Joe **spoken English.**
(Culicover and Winkler 2008: 647)

¹⁰ Culicover and Winkler (2008: 632-633) は, 寄生的空所や多重 WH疑問文や擬似空所化の容認可能性に基づき, 比較倒置 (comparative inversion: CI) には重名詞句転移が適用されていないことを指摘している。Culicover and Levine (2001) は, 文体的倒置文は軽倒置文 (light inversion: LI) と重倒置文 (heavy inversion: HI) に峻別される必要があると主張し, HIは主語に重名詞句転移が適用されて導かれるという分析が提案されている。

¹¹ Park (2017: 227) では, *nor* 節において, 焦点の意味を伴う主語であれば, (i) のように, 複数の助動詞の後に生じることができることが指摘されている。(i) a. A minor brawl between Arabs and Jews would have been nothing, **nor would have been** Israeli Arab demonstrators clashing with police in Arab townships, or Jewish settlers and Palestinians attacking each other's persons and property in the occupied territories. (COCA) b. This harassment used the mechanisms provided by the research ethics industry on campus, and it seems likely that a private therapist would not have been such an easy target, **nor would have a** journalist. (BNC) Park (2017: 227-228) では, さらに, *as* 倒置や *so* 倒置にも, 同様のことがあてはまることを指摘されている。(ii) a. Jane had been there, and **so had been** her boy friend. b. Sandy would have been very angry, **as would have been** all of the people who invested in the project. (Culicover and Winkler 2008: 652)

¹² 対照的で焦点を担う句 *spoken English* が残留するということは, Maeda (2021) とは異なり, 比較倒置では, 動詞句削除が義務的ではないことを示している。Maeda (2021) によれば, 動詞句内に {XP, YP} 構造が生じ, ラベルを決めることができず, (28) の派生は破綻することになる。

Park (2017: 218) では、HPSG の *inv-focus-cl* により、比較節に2つの助動詞が生じる時、(29)に見られるように、その主語が2番目の助動詞と助動詞ではない動詞句の間に生じることが許されることを指摘している。

(29)a. John might have eaten cookies faster than *might have* Paul **made**.

b. Mike wrote more books than *would have* John **read**.

この観察が正しいとすると、複数の助動詞を伴う倒置文の文末には、主語と動詞句内要素という複数の焦点要素が生じることになる。

2. 複数の助動詞を伴う倒置文：移動と削除に基づく分析

2.1. 小節分析 (small clause analysis): Stowell 1978, Heggie 1988, Moro 1997, 2000, Dikken 2006, Samko 2014, LaCara 2015, Griffiths and den Dikken 2021

本稿では、上昇述語としての *be* に基づく分析 (cf. Stowell 1978, Heggie 1988, Moro 1997, 2000, Dikken 2006, Samko 2014, LaCara 2015, Griffiths and den Dikken 2021) を仮定し、複数の助動詞を伴う倒置文の基底構造は、小節構造を含む (30a) であると主張する。¹³ 小節は、主部 (subjects) と述部 (predicates) から成り、主部は複数の助動詞に後続することから、Culicover and Winkler (2008), Samko (2014), LaCara (2015), Maeda (2021) が仮定しているように、通常の主語位置、すなわち、TP の指定辞にはないと仮定する。また、述部は、(30b) に示されているように、語彙的動詞 (lexical verbs) であり、語彙的動詞には *being* や *V-ing* や *V-en* が含まれると、本稿では、仮定する。¹⁴

(30)a. [_{TP} [_{NP} *e*] TENSE/(modal) [_{AUXP} (have) (be) [_{small clause} Subjects + Predicates]]]

b. Predicates: lexical verbs: *being*, *V-ing*, and *V-en*

(30a) で示されているように、小節の主語に先行するのは、本稿では、節点 AUX に支配される助動詞である。すなわち、(30a) の主語は空いている NP 位置 [_{NP} *e*] であり、主部と述部から成る小節を

¹³ *Be* は上昇述語であるとの分析を仮定するが、小節を選択する主節の *have* や *be* は、述語としての助動詞である。この分析は、動詞の *be* と助動詞の *be* があり、語彙的に区別されると主張する Williams (1984) や Kaga (1985) の分析に基づくものである。従って、*be* や *have* が V から T に移動する操作 (cf. Kayne and Pollock (1978), Roberts (1998)) は仮定しない。2種類の *be* と *have* については、Akmajian and Wasow (1975), Akmajian, Steele and Wasow (1979), Williams (1984), Kaga (1985), Huddleston and Pullum (2002), Harwood (2013), Bošković (2014), Aelbrecht and Harwood (2015), 木村 (2015a, 2015b, 2016a, 2016b, 2016c, 2016d, 2018, 2021a, 2021b) 等を参照のこと。

¹⁴ *Being* が語彙的動詞であるとする分析については、Fabb (1983), 有元 (1988), Samko (2014), Ramchand and Svenonius (2014), Ramchand (2018), 木村 (2021a) を参照のこと。

助動詞の *have* や *be* が選択する構造を持つとする分析を小節分析と呼ぶことにする。この分析は、(31) に示されている助動詞の固定された順番に依っている。

(31)a. Betsy must have been being hassled.

b. finite modal > perfect *have* > progressive *be* > passive *be* > lexical verb

(cf. Aelbrecht and Harwood 2015)

本稿の分析は、(30) から明らかなように、語彙的動詞である *being* や *V-ing* や *V-en* を述語とする小節を、主節の助動詞 *have* や *be* が選択するという分析である。¹⁵ ここでの分析に従うと、(30a) を基底構造とする文には、概略、その派生過程が異なる3種類の文が存在することになる。小節の主部が主節の主語位置に上昇することにより導かれる文がある。これは、通常の文である。第2に、小節の述部が主節の主語位置に上昇することにより導かれる文がある。これが、文体的倒置文である。第3に、Chomsky (2013, 2015) の Labeling algorithm により、小節の主語は、元々の位置より高い位置、すなわち、焦点句 FocP の指定辞に移動するが、主節の主語位置まで移動することがない。この時、この後の派生に2通りある。第一の選択は、空の主語位置を *there* で埋めることである。この選択の結果、存在文が導かれることになる。第二の選択は、本稿で分析の対象となっている複数の助動詞を伴う倒置文である。本稿では、この構文に対して、LaCara (2015) の分析に修正を加えた移動と削除に基づく分析を提案する。

2.2. 複数の助動詞を伴う倒置文に対する小節分析を支持する証拠

本稿の注5で、例文 (14b) は、Potts (2002) が査読者との議論の過程で示された例文であり、主語が重いことにより、転移が適用されているのではないかと査読者の指摘を支持する証拠として提出された例文であることを紹介した。(14b) を (32) として採録する。

(32) (= (14b)) By the end of the trip, Klaus will have seen many bats, as *will have* Eddie.

Potts (2002) では、複数の助動詞と主語との間で倒置が起こるという現象に関心が向けられておらず、比較節と述語 *as* 挿入節において、主語と助動詞 *do* との随意的な倒置 (optional inversion) があり、同じ制約に従うとの指摘がなされ、関連するデータが (33) である。

¹⁵ 動詞句削除に基づく一般化 (Non-finite *have* always stays overt, *being* is obligatorily elided, and *be* and *been* are optionally elided. (Aelbrecht and Harwood (2015: 66), cf. Akmajian and Wasow (1975), Sag 1976)) に基づき、*being* が語彙的動詞で、*have* や *been* は助動詞であるとする分析に関しては、木村 (2016b, 2016c, 2018) を参照のこと。

- (33)a. Buzz has been flying longer than *has* Chuck (*been (flying)).
 b. By the end of the trip, Klaus will have seen many bats, as *will* Eddie (*have (seen)).

助動詞 *will* と主語 *Eddie* が倒置されている (33) は非文法的で、複数の助動詞 *will have* と主語が倒置されている (32) (= (14b)) が文法的であるという点については、何ら説明が与えられていない。この問題に対して、本稿の分析、すなわち、(30a) を基底構造として仮定する小節分析に基づくと、適切な説明をすることができる。(32) の *as will have Eddie*, (33) の *than has Chuck been flying* と *as will Eddie have seen* の記号列を、本稿の分析に基づき表わすと、(34) となる。

- (34)a. *as will have Eddie seen many bats*
 b. **than has Chuck been flying*
 c. **as will Eddie have seen many bats*

(34a, b, c) の記号列を (30a) と照らし合わせた時、(34a) が文法的であるにもかかわらず、(34b, c) が非文法的である理由は一目瞭然である。(34a) では、*Eddie seen many bats* が (30b) の述部の基底に合致しているので文法的なのである。その一方で、(34b) の *has Chuck been flying* や (34c) の *will Eddie have seen many bats* は (30b) で規定されている述部ではなく助動詞を含んでいる。これが、(33) が非文法的な理由であると、本稿の小節分析に基づく分析では、説明を与えることができる。この現象は、(30b) のように、語彙的特性を反映させた言語分析が求められることを示している。

2.3. 複数の助動詞を伴う倒置文の派生

2.3.1. 移動と削除に基づく分析：LaCara (2015)

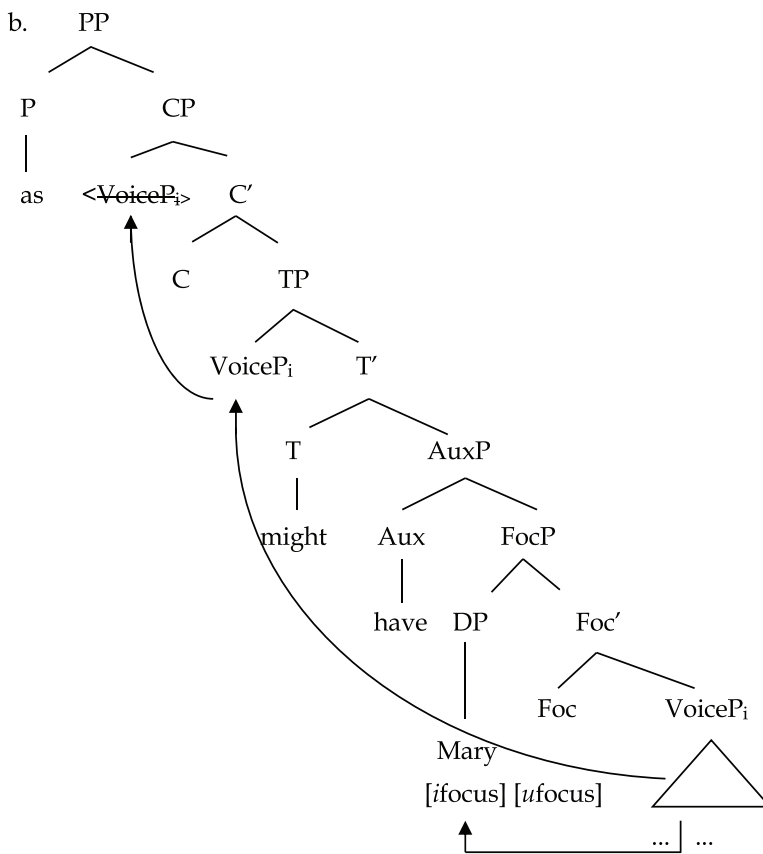
複数の助動詞を伴う倒置文の構造及び派生を検討する際に、考慮されなければならない倒置文の特性をまとめると、次のようにまとめることができる。

- (35)a. 倒置文の主語は、基底構造では、動詞句内にあり、焦点句 *FocP* の指定辞の位置に移動する。
 (LaCara 2015)
 b. 態と項構造における空所と先行詞のミスマッチを考慮すると、分離動詞句を仮定し、*vP* が *VoiceP* に支配されていなければならない。(Merchant 2003, LaCara 2015)

i) 複数の助動詞を伴う倒置文の特性 (35), ii) Samko (2014) と LaCara (2015) の提案する構造, iii) 本稿が提案する小節分析 (30) に基づく構造とその派生過程は、概略、(36) である。助動詞 *be* や *have* が *AuxP* の主要部 *Aux* で、*Aux* は補部として *FocP* を取る。*FocP* の指定辞が、焦点を担い、強勢が置かれる主語や動詞句要素の着地点になる。主要部 *Foc* が、本稿が提案する小節分析 (30) の小節で

ある VoiceP を、補部として選択する。Voice が *vP* を、*v* が VP を補部にする構造である。(36b) での派生は、主語 Mary が *vP* の指定辞の位置から、最終的には FocP の指定辞の位置に移動する。この移動は、Probe-Goal のメカニズムに基づき、値を持たない素性に値を付与 (valuation) するために、行われる。主語 Mary には焦点素性 (focus feature) が付与されている。FocP の主要部 Foc が持つ値を持たない素性 (unvalued feature) が Probe で、素性の値を持つ Goal を探索する。Probe である主要部 Foc が Goal として主語 Mary の焦点素性 [+focus] との間で適合の関係 (a matching relation) が成立する。Probe が Mary と一致 (Agreement) の関係が成立し、値を持たない素性が素性転写 (feature-copying) により、値が付与される。(Chomsky 2001) 主語 Mary のコピーを含む VoiceP が TP の指定辞を介して、CP の指定辞に移動し、比較節削除が適用されて、VoiceP は無音声化、すなわち、削除される。

(36) a. ... as might have Mary



2.3.2. 動詞句内要素の残留：移動と削除に基づく派生の修正

第2.3.1節では、述語 *as* 挿入節を例に取り、その派生を、LaCara (2015) に従い、例示した。述語 *as* 挿入節に対する移動と削除に基づく分析である。しかしながら、Culicover and Winkler (2008) や Park (2017) で指摘されているように、動詞句内要素が主語に後続する位置に生じることがある。こ

れは、動詞句内の主語が FocP の指定部に移動した後、主語以外の動詞句要素を含む VoiceP が TP の指定辞、それから CP の指定辞に移動し、比較節削除が適用されて、述語 *as* 挿入節が導かれるとの分析では扱うことができない場合があることを示している。この点を、次の文を例にとり、考えてみることにする。

(37)a. (= (27b)) Jim would have translated the English much better than *would have* students in his class **read the Spanish.**

b. (= (28b)) John read French more fluently than *could have* Joe **spoken English.**

(38)(= (29)) a. John might have eaten cookies faster than *might have* Paul **made.**

b. Mike wrote more books than *would have* John **read.**

(37-38) では、Park (2017) によれば、主語に対照的で焦点を担う句が後続している。

述語 *as* 挿入節等の倒置文を分析する際に、Maeda (2021) は、(39) の非文法性を根拠に、義務的に動詞句削除が適用されなければならないとする分析を提案した。これにより、{XP, YP} 構造によって、ラベルが決まらず、派生が破綻することを回避できると主張されている。

(39) (= (6)) a. Abby knows more languages than her father knows/*does* her father (*know).

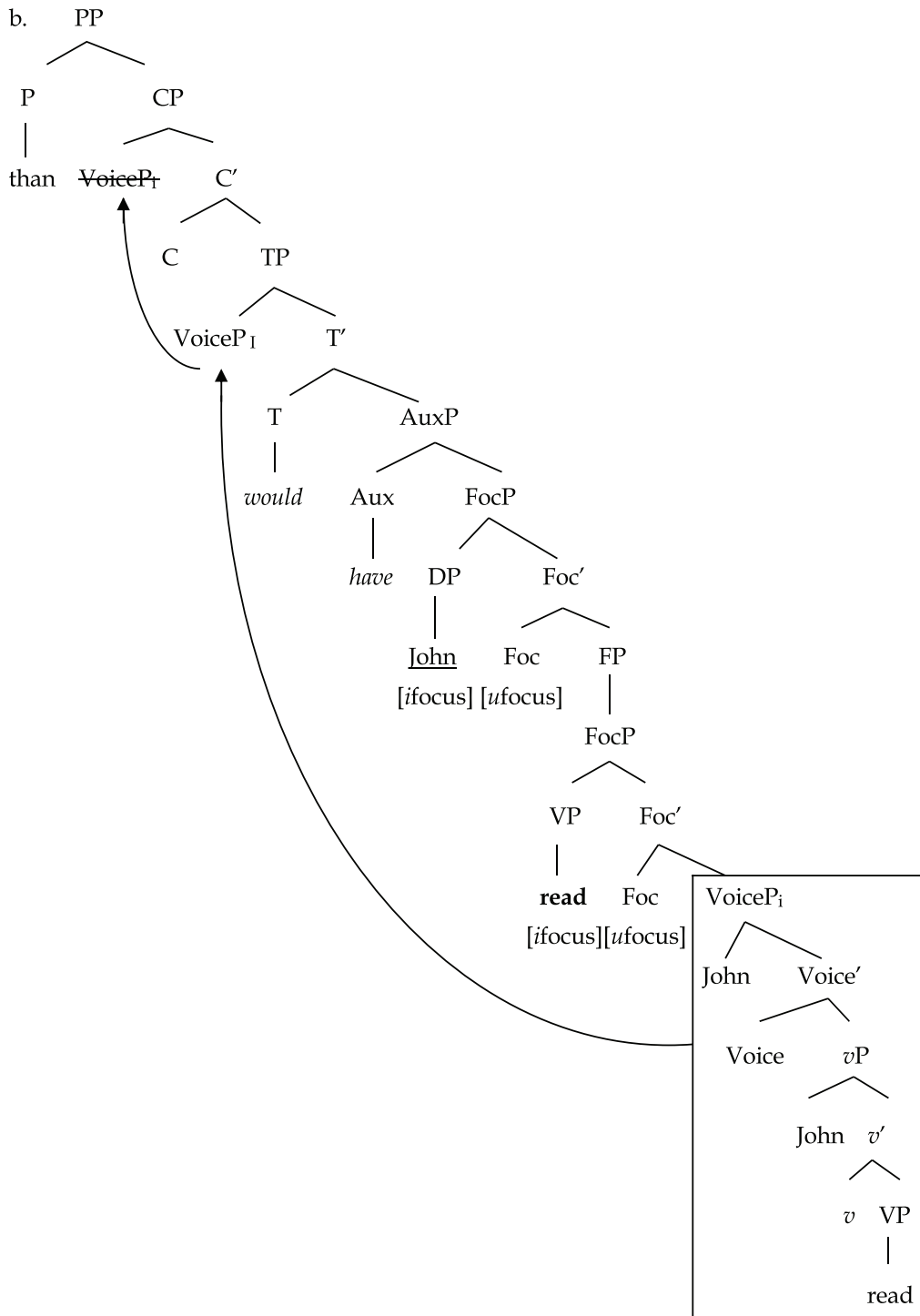
b. Abby got the Nobel Prize, as *did* her father (*get the Nobel Prize).

(37-38) と (39) を較べてみると、(39) において、動詞句削除が義務的であるのは、*than* 節や *as* 節の動詞あるいは動詞 + 目的語が主節の動詞あるいは動詞 + 目的語を同じ表現だからである。すなわち、旧情報・既知情報なので、削除されなければならないのである。その証拠に、*than* 節内の動詞あるいは動詞 + 目的語が主節の動詞あるいは動詞 + 目的語と異なり、新情報・未知情報である時には、削除されないことが許される。

ここでの考察が正しいとすると、主語のみが移動する現象を考察の対象としている、移動と削除に基づく分析を提案している LaCara (2015) の分析には修正が求められることになる。LaCara (2015) が提案する派生は、主語に後続する要素が義務的に削除される事例に説明を与えることができるが、動詞句内要素が主語に後続する位置に生じる事例には説明を与えることができない。本稿の分析、すなわち、LaCara (2015) の分析に修正を加えた、複数の助動詞を伴う倒置文に対する移動と削除に基づく分析を、(38b) を例にとり、示す。主語と主語に後続する動詞句内要素も焦点化されることから、TP 内に多重の焦点句 FocP があると仮定する。上位の FocP の指定辞に小節内の主語が移動し、下位の FocP の指定辞に動詞句内要素が移動すると仮定する。素性の値を持つ句が Goal となる Probe-Goal 関係に基づく一致のメカニズムに従い、多重の Foc の指定部への移動を終えた後の段階で、VoiceP が、TP の指定辞に、それから CP の指定辞に、連続循環的に移動し、比較節

削除が適用されて、複数の助動詞に主語が後続する倒置文が導かれる。このような本稿の過程に基づく (38b) の派生は、(40) である。

(40) a. ... than *would have* John **read**



3. 結論

本稿では、複数の助動詞を伴う倒置文に対して、基底構造における主語位置は空いている NP 位置 [e] であり、主部と語彙的動詞の述部から成る小節を助動詞の have や be が選択する構造を持つとする小節分析 (41) を提案した。

- (41) (= (30)) a. [_{TP} [_{NP} e] TENSE/(modal) [_{AUXP} (have) (be) [_{small clause} Subjects + Predicates]]]
b. Predicates: lexical verbs: *being*, *V-ing*, and *V-en*

小節の主語に先行するのは、AUX に支配される助動詞である。すなわち、助動詞 be や have が AuxP の主要部 Aux で、Aux は補部として FocP を取る。FocP の指定辞が、焦点を担い強勢が置かれる主語や動詞句要素の着地点である。主要部 Foc が、小節である VoiceP を、補部として選択する。Voice が *vP* を、*v* が VP を補部に取り取る構造を仮定した。主語が *vP* の指定辞の位置から、最終的には FocP の指定辞の位置に移動する。この移動は、Probe-Goal のメカニズムに基づき、値を持たない素性に値を付与するために行われる。主語には焦点素性が付与されていて、FocP の主要部 Foc が持つ値を持たない素性が Probe で、素性の値を持つ Goal を探索する。Probe である主要部 Foc が Goal として主語の焦点素性との間で適合の関係が成立する。Probe である主要部 Foc と Goal である主語 Mary の焦点素性 [+focus] の一致に基づき、値を持たない素性が素性転写により、素性の値が付与されることになる。さらに、主語のみならず動詞句内要素が主語に後続する位置に生じることがある。主語のコピーを含む VoiceP が TP の指定辞を介して、CP の指定辞に移動し、比較節削除が適用されて、VoiceP は無音声化されるというのが、LaCara (2015) である。しかしながら、主語以外の動詞句内要素が残留するということは、LaCara (2015) の分析では、このままでは扱うことができないということになる。これを踏まえ、本稿では、LaCara (2015) の分析に修正を加え、複数の助動詞を伴う倒置文に対する移動と削除に基づく分析を提案した。主語と主語に後続する動詞句内要素が多重に焦点化されることから、TP 内に多重の焦点句 FocP があると仮定した。上位の FocP の指定辞に小節内の主語が移動し、下位の FocP の指定辞に動詞句内要素が移動する。値を持たない素性を持つ Foc 主要部が Probe で、素性の値を持つ句が Goal となる Probe-Goal 関係に基づく一致のメカニズムに従い、多重の Foc の指定部への移動を終えた後の段階で、VoiceP が、TP の指定辞に、それから CP の指定辞に、連続循環的に移動し、比較節削除が適用されて、複数の助動詞に主語が後続する倒置文が導かれるという分析を提案した。

参考文献

- Aelbrecht, Lobke, and William Harwood. 2015. To be or not to be elided: VP Ellipsis Revisited. *Lingua* 153 66–97.
Akmajian, A., S. Steele, and T. Wasow. 1979. The Category AUX in Universal Grammar. *Linguistic Inquiry* 10, 1–64.
Akmajian, A., and T. Wasow. 1975. The Constituent Structure of VP and AUX and the Position of the Verb *Be*. *Linguistic*

- Analysis* 1, 205–245.
- 有元將剛 1988. 「英語助動詞の構造」『英文学研究』第64巻第2号 245–263.
- Bolinger, Dwight. 1977. *Meaning and Form*. London: Longman.
- Bošković, Željko. 2014. Now I'm a Phase, Now I'm Not a Phase: On the Variability of Phases with Extraction and Ellipsis. *Linguistic Inquiry* 45, 27–89.
- Bresnan, Joan. 1977. Variables in the Theory of Transformations. In *Formal Syntax*, ed. by Peter W. Culicover, Thomas Wasow, and Adrian Akmajian, 157–196. New York: Academic Press.
- Bresnan, Joan. 1994. Locative Inversion and the Architecture of Universal Grammar. *Language* 70, 72–131.
- Brueing, Benjamin. 2015. Subject Auxiliary Inversion. (to appear in *Syncom*.)
- Chomsky, Noam. 1977. On *WH*-Movement. In *Formal Syntax*, ed. by Peter W. Culicover, Thomas Wasow, and Adrian Akmajian, 71–132. New York: Academic Press.
- Chomsky, Noam. 2001. Derivation by Phase. In *Ken Hale: A Life in Language*, ed. by Michael Kenstowicz, 1–52. Cambridge, MA: MIT Press.
- Chomsky, Noam. 2013. Problems of Projection, *Lingua* 130, 33–49.
- Chomsky, Noam. 2015. Problems of Projection: Extensions, *Structures, Strategies and Beyond: Studies in Honor of Adriana Belletti*, ed. by Elisa Di Domenico, Cornelia Hamann, and Simona Matteini, 3–16, John Benjamins, Amsterdam.
- Culicover, Peter W. and Robert D. Levine. 2001. Stylistic Inversion in English: A Reconsideration. *Natural Language and Linguistic Theory* 19, 283–310.
- Culicover, Peter W. and Susanne Winkler. 2008. English Focus Inversion. *Journal of Linguistics* 44, 625–658.
- Dikken, Marcel den. 2006. *Relators and Linkers: The Syntax of Predication, Predicate Inversion, and Copulas*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Emonds, Joseph E. 1976. *A Transformational Approach to English Syntax: Root, Structure-Preserving, and Local Transformations*. New York: Academic Press.
- Fabb, Nigel. 1983. Three Squibs on Auxiliaries. *Papers in Grammatical Theory* (MIT Working Papers in Linguistics 5), 104–120.
- Griffiths, James, and Marcel den Dikken. 2022. English VP Ellipsis in Unusual Subject Configurations: Reviving the Spec-head Agreement Approach, In *The Derivational Timing of Ellipsis*, ed. by Guliz Gunes, and Aniko Liptak, 97–130. Oxford: Oxford University Press.
- Harwood, William. 2013. *Being Progressive is Just a Phase: Dividing the Functional Hierarchy*. Doctoral Dissertation, Ghent University.
- Heggie, Lorie A. 1988. *The Syntax of Copular Structures*. Doctoral dissertation, University of Southern California.
- Huddleston, Rodney, and Geoffrey K. Pullum. 2002. *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Kaga, Nobuhiro. 1985. The Syntax of *Be* and *Have*: AUX or Main Verb 『英文学研究』第62巻第2号 275–292.
- Kayne, Richard, and Jean-Yves Pollock. 1978. Stylistic Inversion, Successive Cyclicity, and Move NP in French. *Linguistic Inquiry* 9, 595–621.
- 木村宣美 2015a. 「述語削除と法助動詞の陳述緩和的・根源的意味」『英語語法文法学会第23回大会予稿集』40–47.
- 木村宣美 2015b. 「2種類の助動詞倒置」日本中部言語学会第62回定例研究会配布資料(静岡県立大学)
- 木村宣美 2016a. 「述語削除と法助動詞 *must* の意味」『人文社会論叢 (人文科学篇)』第35号, 弘前大学人文学部, 1–19.
- 木村宣美 2016b. 「動詞句削除: 2種類の *be* に基づく分析」『日本言語学会第152回大会予稿集』186–191.

- 木村宣美 2016c. 「連結詞 be の語彙的特性に基づく動詞句削除分析」日本中部言語学会第63回定例研究会配布資料 (静岡県立大学)
- 木村宣美 2016d. 「述語句削除と法助動詞 must の陳述緩和的・根源的意味」*Ars Linguistica (Linguistic Studies of Shizuoka)* vol. 23, 53–70.
- 木村宣美 2018. 「BE の語彙的特性に基づく動詞句削除分析」*Ars Linguistica* 25, 34–53.
- 木村宣美 2021a. 「動詞としての現在分詞 being」『人文社会科学論叢』第10号, 弘前大学人文社会科学部, 35–55.
- 木村宣美 2021b. 「2種類の倒置文」『人文社会科学論叢』第11号, 27–51.
- LaCara, Nicholas. 2015. Discourse Inversion and Deletion in *As*-Parentheticals. In *Parenthesis and Ellipsis: Cross-Linguistic and Theoretical Perspectives*, ed. by Marlies Kluck, Dennis Ott, and Mark de Vries, 219–245. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Maeda, Masako. 2021. Labeling in Inversion Constructions, *English Linguistics* 38, 91–105.
- Merchant, Jason. 2003. Subject-Auxiliary Inversion in Comparatives and PF Output Constraints. In *The Interfaces: Deriving and Interpreting (Omitted) Structures*, ed. by Kerstin Schwabe, and Susanne Winkler, 55–78. Amsterdam: John Benjamins.
- Merchant, Jason. 2013. Voice and ellipsis. *Linguistic Inquiry* 44, 77–108.
- Moro, Andrea. 1997. *The Raising of Predicates: Predicative Noun Phrase and the Theory of Clause Structure*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Moro, Andrea. 2000. *Dynamic Antisymmetry*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Ono, Koji, Norimi Kimura, and Masaki Sano. 1983. On the Syntax of “Stylistic” Rules. *Tsukuba English Studies* 2, 165–200.
- Park, Dong-Woo. 2017. An HPSG Approach to English Comparative Inversion. *Language Research* 53, 203–230.
- Potts, Christopher. 2002. The Syntax and Semantics of *As*-Parentheticals. *Natural Language and Linguistic Theory* 20, 623–689.
- Ramchand, Gillian Catriona. 2018. *Situations and Syntactic Structures: Rethinking Auxiliaries and Order in English*, Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Ramchand, Gillian, and Svenonius, Peter. 2014. Deriving the Functional Hierarchy. *Language Sciences* 46, 152–174.
- Roberts, Ian. 1998. *Have/Be Raising, Move F, and Procrastinate*. *Linguistic Inquiry* 29, 113–125.
- Rochemont, Michael, S. 1978 *A Theory of Stylistic Rules in English*. Doctoral dissertation, University of Massachusetts, Amherst.
- Rochemont, Michael S. and Peter W. Culicover. 1990. *English Focus Constructions and the Theory of Grammar*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Sag, Ivan A. 1976. *Deletion and Logical Form*. Doctoral dissertation, MIT.
- Samko, Bern. 2014. A Feature-Driven Movement Analysis of English Participle Preposing. *Proceedings of the 31st West Coast Conference on Formal Linguistics*, 371–380.
- Stowell, Tim. 1978. What Was There Before There Was There. *Papers from the Fourteenth Regional Meeting Chicago Linguistic Society*, 458–471.
- Toda, Tatsuhiko. 2007. *So*-Inverted Revisited. *Linguistic Inquiry* 38, 188–195.
- Williams, Edwin. 1984. *There*-Insertion. *Linguistic Inquiry* 15, 131–153.